

戦時下における「世相と良識」

——井伏鱒二『多甚古村』

滝口明祥

論文要旨

井伏鱒二『多甚古村』は戦時下のベストセラーであり、井伏の代表作の一つである。だが同時代に「世相と良識」を描いたとして好評のうちに迎えられるこの作品は、戦後においては立て続けに批判の対象となるなど、評価にはかなりの振幅がある。検閲下に書かれた作品を評価する際には表面的な言葉に惑わされず、構造を読み解いていくという作業が特に重要となってくるだろう。農村を舞台にして、その「風俗」を描いた『多甚古村』は、同時代における「国民文学」という潮流に合致したものに見えるが、この作品を仔細に読み解いていけば、その中に同時代の支配的な言説から逸脱する要素を種々見出すことが出来る。ただし、『多甚古村』の結末は実に「非常時」にふさわしいものとなっており、逸脱の諸要素は回収されていると言わざるを得ない。しかし、続編である『多甚古村補遺』が付け加わることによって、『多甚古村』の中にある批評性も効力を発揮するのだ。

キーワード【戦争、非常時、検閲、風俗小説、農村】

一、はじめに

井伏鱒二の「盗作」疑惑をセンセーショナルに煽り立てた書物である猪瀬直樹『ピカレスク』（小学館、二〇〇〇・十二）に、『多甚古村』（河出書房、一九三九・七）への言及がないのは如何にも不思議なことと思われる。何故なら、その作品こそが『黒い雨』（新潮社、一九六六・十）に先だって一般の人物が書いた日記をもとに作られた小説に他ならないのだから。しかも、『多甚古村』は「おそらく戦前における井伏鱒二の唯一のベストセラーである」^{〔1〕}などとも言われるように、井伏の名を世間に広く浸透させた役割としては、直木賞を受賞した『ジョン万次郎漂流記』（河出書房、一九三七・十二）などよりもむしろ大きかったと考えられるのだ。

同時代評を瞥見してみれば、『多甚古村』の出版が大きな好評のうちに迎えられたことが分かる。たとえば宇野浩二「文藝好き三種」（『読売新聞』一九三九・八・一八）は「井伏鱒二の『多甚古村』は、言葉どほり、私が近頃で最も愛読した本の一つである」と言い、菊池寛「話の屑籠」（『文藝春秋』一九三九・九）は「井伏鱒二君の『多甚古村』という本を面白くよんだ。読後二、三日楽しかった」と述べ、中島健蔵「文学的人物論・井伏鱒二」（『文藝』一九三九・十二）は「『多甚古

村」は、再び民衆の知恵と明るさを、前よりもしつかりした腰つきで我々に示すことになつた」として「井伏の再起」をそこに認めている。また、河上徹太郎「最近の長編小説・完璧の仮構」（『帝国大学新聞』一九三九・十一・一六）は、「井伏氏の『多甚古村』が、東宝で映画化されるといふ。矢張り映画人が眼をつけさうな代物だ、とうなづける作品である」と述べ、次のように称賛する。

「多甚古村」は、確かに此の作者の近来の傑作であり、その文学的資性の最も厭味のない現れであり、氏の生来の想像力が邪まな誘惑に乗ることなく健やかに働き続けてゐることのいゝ証拠である。材を一寒村の若い巡査の駐在日記にとり、その村の老若男女あらゆる種類の人々の行状を為すことによつて、世相と良識と詩情を表さうとしたものであり、殊に警察沙汰の面から描いたことは、作者が所謂世の苦勞人であることから見ても、うつつつけの形式なのである。

ここで河上が『多甚古村』を「世相と良識と詩情を表さうとしたもの」と捉えていることに注目したい。「詩情」はともかくとして、戦時下における「世相と良識」とは、如何なるものだったのだろうか。たしかにそうしたものを含んでいるからこそ、この作品は同時代において多くの読者に迎えられたのだろうが、同時にそれは今日から見た場合に単純に評価できない要素を含んでいると言わざるをえないのではないか。

戦後に『多甚古村』への批判が噴出するのも、おそらくその辺りの事情と関係しているはずだ。拙稿でも述べたように、そうした批判は『多甚古村』が「風俗小説」的であるという点に集約されるだろう。たとえば、寺田透「井伏鱒二論」（『批評』一九四八・四）は、『多甚古村』は「面白くはあつたけれども好きになれなかつた」と言い、「ここに

あるのは人間に対する愛情といふより、世態人情の面白さに釣られた興味の動き」でしかなく、「話の種は深刻であらうと多彩であらうとそれらを追ふ井伏の目は、世間話に身を入れた人間の心のやうにひどく通俗的で大まかなのだ」と述べている。また、杉浦明平「庶民文学の系譜——井伏鱒二について」（『午前』一九四九・二）は、井伏作品を「庶民文学」として評価しつつも、『多甚古村』に関しては「おかみの力をもつた解決者」が主人公の「人情斬」であると斬つて捨て、「今われわれはこの作家井伏のうちにあの侵略戦争を疑わなかつた庶民の姿を認めなければならぬ」とまで言うのである。さらには、『風俗小説論』（河出書房、一九五〇・六）で「風俗小説」を厳しく批判した中村光夫は、「井伏鱒二論」（『文学界』一九五七・十・十二）で「氏の現代小説は一端で風俗小説につながります」と述べ、『多甚古村』については「国民の誰が読んでも差障りのない健全娯楽」であり、その中には「不健全な文学の存在をゆるさなくなった、時勢への顧慮」があり、「井伏氏はかういふ時勢を積極的に謳歌はしなかつたにしろ影響は受けてゐる」とするのである。

だが『多甚古村』は、戦後においても『井伏鱒二選集』に収められ、新潮文庫や岩波文庫から刊行されていることから一般的な人気には根強いものがつたと推測される。そして、それらに附された解説は三者三様に興味深いものとなっている。たとえば、上林暁「後記」（『井伏鱒二選集 第五卷』筑摩書房、一九四八・一二）は、『多甚古村』を書く「作者の筆は天衣無縫」であり、「その軽妙な刷毛によつて、多甚古村といふ、現実的でありながら、また現実離れのした世界が、そこには目に見る如く現出してゐる」と、寺田の批判とは対照的な絶賛を示している。また、伊藤整「解説」（『多甚古村』新潮文庫、一九五〇・二）は『多甚古村』もなかなか面白いが、私としてはその

続編の方が好きである。続編は正編よりものびのびとして小説らしい展開を持つてゐる」として、『多甚古村』とその続編である「多甚古村補遺」（『鸚鵡』河出書房、一九四〇・五）との差異を指摘する。そして佐々木基一「解説」（『多甚古村』岩波文庫、一九五六・八）は、寺田や杉浦らの批判を暗に踏まえつつも、次のように一定の評価を与えている。

作者は戦時下の、ものを書くことが多分に窮屈になりはじめた時期に、権力の代行者たる駐在巡查に自らを仮託し、国家非常時という大義名分をかかげることでかえって、これら名もなき民衆の悲惨と愚行の数々にあくなき興味をそそぐ自由をかちえたかか如くである。〔…〕それは窮余のはてに考えついた苦肉の策、一種の韜晦戦術であつたと思われれる。

佐々木は「国家非常時という大義名分」によつて「民衆の悲惨と愚行の数々」を描くことが出来たのだと評価しているのであり、他の論者たちよりも「風俗」に積極的な意味を見出していると言える。また佐々木は続く箇所で、「戦時下の作品には、多かれ少なかれ、こういう苦肉の策が用いられているので、どこまでが作者の本心で、どこまでがみせかけの戦術であるかを見きわめるのは大へんむずかしい」と述べており、厳しい検閲という外的条件下に書かれた作品を読む際には一定の配慮が必要となることに注意を促している。そして佐々木は、「また、苦肉の策として用いられた手段が、逆に作家に向かつてはねかえり、作家の手足を縛りつける場合もないではない」と続けるのだ。このことは論理的に、「本心」と「みせかけ」とは外部から見分けてづらいのみならず、作者の内部においても分かちがたいものとなつている可能性を示唆するものともなりえよう。ただし、佐々木はそのような「限界」を指摘しつつも、基本的にはこの作品に戦時体制への

「批判」を見出そうとしているようだ。

しかし、作者の眼はこの作品においても、決して牙えを失つていないし、反語的精神も鈍磨していない。たとえば、出征兵士を見送る妻が別れをおしんで泣くと、「幾ら亭主を見送るとはいへ泣くとは不都合だ」とその父親が叱つている。そのあとで甲田巡查をして「私も拳手の礼をした。しかし私はどうもまだ拳手の礼がへたくそで、ときはきとした格好が出来ないのである。」と云わせている。

このようにして佐々木は『多甚古村』に「批判」を見出していくわけだが、しかし率直に言つて、ここで述べられている場面を「批判」と言うことは現在、十分には納得しがたいのではないか。個々の場面を切り取つて断章取義的に論じてしまえば、いくらでも恣意的な解釈が可能となるに違いない。個々の場面を解釈するにあつては、それがどのように他の場面と結びついているか、どのような文脈の下に置かれているかを測定することが最低限必要となつてくるはずだ。管見の限りでは先行研究において、そのような作品の構造をも含めて考察の対象としてしているのは、前田貞昭による論考¹⁾を措いて他にはない。前田は先述した伊藤整と同じく『多甚古村』と『多甚古村補遺』との間にある差異に注目し、後者に「権力批判の萌芽」を見出している。本稿においても、前田の指摘を踏まえつつ『多甚古村』の構造を捉えることを目的とする。そして、それが同時代においてどのような意味を持つていたのかについても考えてみたい。

権錫永は、戦争への協力が抵抗か、というような評価軸は「すべての言説を両者のうちのいずれかに割り切ることを強いてしまふ」のであり、「言説というものが必ずしも統一体とは限らないという認識の下で、矛盾する要素・亀裂——あるいは不連続性——を、素直に矛盾

として亀裂として読む」必要性を喚起している。権によれば、「戦争期の規格化の視線にさらされながら、逸脱⇨批評の欲望が言説として結実したときに、〈矛盾・亀裂⇨逸脱の言説〉となる」のである。⁽⁵⁾『多甚古村』および「多甚古村補遺」を読む際にも、協力か抵抗か、に性急に割り振る前に、その中にある「矛盾・亀裂」を読みこんでいくことが必要となってくるだろう。

また、この作品が一読者の日記をもとにしているという事実も重要な要素として注目される。何故なら、成田龍一が言うように「出来事と出来事が生起する「現場」を描く方法が、一九三〇年代に焦点として浮上してきている」⁽⁶⁾のであり、井伏の『多甚古村』もまた、そのような同時代の動向の中で見ていく必要があるのだから。そして一九三〇年代の後半とは「出版統制の画期」⁽⁷⁾であるとともに、出版界が「未曾有の好況」⁽⁸⁾を呈していた時期でもあったことに注意する必要があるはずだ。まずは一読者の日記が『多甚古村』となる経緯を辿ってみることにしよう。

二、「文学」の変容

『多甚古村』は発表当時、映画化されただけではなく、新国劇によって劇化もされており、東京や名古屋で上演されている。名古屋公演の際のパフレットに掲載された井伏の文章（『多甚古村の巡査』、「新国劇」一九四〇・二）中には、『多甚古村』の駐在巡査のモデル、「某巡査」への言及がある。この「某巡査」こそが『多甚古村』のもとになる日記を著した人物に他ならない。川野一というその人物は後年、一連の経緯を次のように語っている。⁽¹⁰⁾

その頃新進作家だった井伏鱒二の小説が特に好きで、井伏さんにファンレターを出したりしていました。駐在所の勤務は暇だった



から、それこそつれづれなるままに日記を書き続け、駐在所巡査の生活というものを知ってもらうために、井伏さんのものとへ送ったんです。「…」井伏さんに送ってしばらくすると、井伏さんから『これは小説の題材として使えるから、そっくりくれないか』という手紙がきました。

そこで川野は「差し上げてよいが、それには条件がある。お礼はいただかない。そのかわりなるべくカットしたりいじくったりせず、元の文章を生かしてほしい」と返事を出すと、井伏から「承知した。前後の入れかえや継ぎはぎはするが、できる限り元の文章を生かす」という返事が折り返し来た。だが、「途中から井伏さんの空想がはいって原文と違ってきたのを、わたしとしては残念に思」い、井伏の作品からも遠ざかっていったと言う。一方で川野は「井伏さんは当時『東京へ出てきたら歓待する』という手紙をくれたし、いまはわたしも別にこだわりは持っていません」とも述べているのだが、当時『多甚古村』に対して複雑な思いを抱いていたことは間違いないだろう。

この経緯に関して、井伏の側も「徳島の町外れの街道沿いにあった駐在所の巡査が、会ったこともないのに、どういう積りか、毎月、五、六十枚宛自分のことを書いた日記を送り届けてきた。それが何年間かうちに書いてみよいかという気になった。時々眼を通してみたが、そのうち書いてみよいかという気になった。駐在所の巡査に独身者はいないのだが、そういうことは無視して書いたし、終りのほうは大分ウソがまじっている」と発言しており、基本的な事実関係は一致していると言っつてよいと思われる。

ところで、堀部功夫が指摘している事実ほもつと注目されてよいのではないのだろうか。すなわち、『多甚古村』の出版後、川野自身の本を出版していることである。しかもそれは一冊ではない。『交番』（新

光閣、一九四一・三）、『交番風景』（鶴書房、一九四一・八）、『恒安町の朝』（作家社、一九四三・九）と数年の間に三冊も出版されているのだ。その売り出しに『多甚古村』がおおいに利用されたことは、その帯文を見れば明らかだろう。『交番』の帯には、「多甚古村の主人公登場／問題の書」と大きな字で書かれており、「多甚古村」の主人公、甲田巡査は本書の著者川野一氏であります／これは巡査の描いた警察の世界である——／これは一警察官の大胆なる生活記録である——」とある。また、『交番風景』の帯には「街へ出タ『多甚古村』ノ甲田巡査」と大きくあり、「又も巨弾!!／実相文学の最高峰／新鮮全裸の解剖報告／戦時下国民生活の種々相を、総ゆるる角度を変へて／一交番巡査が冷静、真摯、素朴、公平なる活眼を以て／むき出しに語る一大職場快著／ひたむきに貫く全日本人の心臓／これぞ我等の座右銘」と書かれている。それまで単なる一巡査であった川野が三冊も著書出版することが出来た理由として、『多甚古村』の存在が大きかったのは間違いないが、先述したように、一九三〇年代において「現場」を描く方法が多様に試みられるという状況があったことも影響していると思われる。

板垣直子『事変下の文学』（第一書房、一九四一）は、豊田正子『綴方教室』（中央公論社、一九三七・八）、小川正子『小島の春』（長崎書店、一九三八・一一）、野澤富美子『煉瓦女工』（第一公論社、一九四〇・五）など、さまざまな職場や境遇にいる女性たちが執筆した「素人の文学」が「非常な売行をみせた」ことについて、次のように述べている。

それらは勿論、文学性よりも題材につながる興味に於いて存在したものである。従来の文学が取扱ったやうな或ひは取扱はないやうな貧困した生活の描写と生な感情を持つてゐるところに、社

会が吸ひついたとみるべきであらう。「…」これらの大きな大衆性は、勿論高い読者層の減つたことを意味するものでもないし、読者の興味の下つたことにもならない。高級な読者は前のやうに残り且つ一方でふえてゐる半面に、新読者の急造されてゐる事実を語るものである。つまり、大ざっぱにいつて、「文学」の概念が広くなり、その意味での興味が普及したといつてよいであらう。

それら「素人の文学」の流行はまた、火野葦平『麦と兵隊』（改造社、一九三八・九）などの戦争文学の流行や、島木健作『生活の探求』（河出書房、一九三七・十）などの農民文学の隆盛ともつながっている。内地と戦地とに関わらず、それぞれの「現場」を報告するルポルタージュの作品がこの時期多く書かれ、しかもそれが「新読者」を多く獲得したのである。そして「新読者」とは、従来の「文学」を愛好する読者とは異なる読者なのであり、この時期、文学場自体が大きな変容を遂げていたのだと言える。谷崎精二「現文壇の常識主義」（『早稲田文学』一九三八・四）は、そのような動向を次のように批判している。

最近の文壇で新しい傾向として注目されてゐる風俗小説及びルポルタージュ文学も、或る意味で常識主義の現れだと見做して、いだらう。社会的批判と思想的展開とを阻まれた現代の文壇で、せめて時代の「感覚」か、時代の「問題」かを握み出して忠実に描かうとした試みが、前者は風俗小説となり、後者はルポルタージュとなつたのだと解釈される。社会を全的に描き、全的に批判する自由を失つた作家が、せめて部分的に見た人生の描写乃至報告である。其処には際立つて新しい批判や展望はない。題材の新鮮性、若しくは重要性と云ふ事が此の二種の文学の特徴である。

ここで谷崎は「風俗小説」と「ルポルタージュ」を同じ現象の二つの側面であると述べている。それは「全的に批判する自由を失つた作

家」による「常識主義」の現れに過ぎないとするのだ。この谷崎の批判は、いわゆる素材派・芸術派論争に先駆けて「素材派」への批判を行ったものだと思えることも可能だと思われる。

その論争の発端となつたとされる上林暁「文藝時評」（『文藝』一九三九・二）は、「外的世界の影響力の強い時代の止むを得ない現象かも知れないが、作家の内的風景の見えないのが寂しい」と言い、「この変転期に臨んで、僕達は時代の子となるために、焦慮したり、飛躍したり、心の秩序を失つたりしてはならない。もう少しじつくりと、内面的に、時間をかけて、成熟的な変化を遂げるべきである」と述べており、先の谷崎の批判と重なるものであることは明らかだ。「風俗小説」も「ルポルタージュ」も「外的世界」ばかりを描いて「内的風景」をなおざりにする（とされる）点で「素材派」の内に含められるのである。

拙稿⁽¹⁾でも述べたように、一九三〇年前後からプロレタリア文学内において注目されていた「報告文学」は、一九三三年の「転向」後の時代状況においては、直接的な批判に代わる「プロテスト」の方法として再び注目を集めることとなる。だが一九三七年の日中戦争の勃発によつて、戦線ルポルタージュが数多く書かれ、従来は左派による「プロテスト」のためのものだった「報告文学」は急速にその性格を変えていく。そうした中で、「報告文学」或いはルポルタージュについての論議も巻き起こつた。たとえば、徳永直「報告文学と記録文学」（『新潮』一九三七・十二）は、「ルポルタージュ（報告文学）」とは、ソ文壇などでは非常に広汎で、記録的小説などもそのうちに含まれるといふし、世界的にも今日ではこの見解によつてゐるといふ。この傾向の本質的には、現実的なものが非常な勢ひで文学領域にそのまま接近しつつ、また尊重されつつあることを意味してゐる。書齋の奥で神秘的に

出来上りつつあつた文学道場が、現実の道路へ投げ出されたやうな一つの世界的傾向をもつた文学革命なのである」と述べ、「報告文学」の革新性を積極的に評価している。⁽¹⁴⁾ また、中野重治「ルポルターージュについて」(『文藝春秋』一九三七・十一)は、「もしレポルターージュ文学が、一つの文学ジャンルとして文学的批判を受けるに値しないとすれば、(…)国民生活の変動期が生み出す無数のレポルターージュ文学について、いゝものと悪いものとの判別はなくなり、扇情的レポルターージュの氾濫と戦はうとする作家たちの努力も、相手の扇情性に自己の扇情性を対置するといふ危険へ墮落せねばならぬ」として、レポルターージュの中に質的な差異を見出す必要性を喚起している。だが、レポルターージュを初めとした「素材派」の文学、特に戦争文学や農民文学は「国策文学」などと呼ばれるような傾向を強めていくのだった。右で述べた上林の主張には、そのような背景があつたのである。

「新潮評論」(「新潮」一九三九・六)は、「素材派」と「藝術派」との対立について、「文学的伝統を尊重し、文学的郷愁の精神をうたふ所謂保守派の、純粹真率な声が近頃しきりに起つてゐる。時代の勢に捻じまげられた邪道を、もとの正道にたちかへらせようとする自然の運動であるとたしかに認められる」としつつも、次のように述べる。

しかし、それはたしかに、文学の一つの正道ではあるが、唯一の正道ではない。こんにち邪道であるかに見えても、将来は正道とならぬとも限らないやうな、さういふ道もある。さういふ道をもちとはず、文学の新道を開拓しようとするのが、藝術派のなかの、保守派と対立する所謂進歩派である。

ここで「進歩派」が具体的に何を指しているかは不明瞭と言わざるをえないが、従来の「文学」の枠に留まらないやうな傾向に期待がかけられていることだけは確かだろう。注意すべきは、「国策文学」

に対して一定の歯止めをかけようとしているかに見える上林や「新潮評論」の筆者にとつても、「文学」に社会性が必要だとする点では「国策文学」と立場を異にしているわけではないことだ。清水幾太郎「文藝時評(3)」(『読売新聞』一九三九・六・二)は、「古い純粹を守る人々と新しい広さに生きようとする人々との対立は、往々信ぜられてゐるやうに、その何れかがこのまま他を支配して行くべきではなく、両者が共に否定されることに依つて解決さるべき問題であり、日本の文学の今後は恐らくこの対立の眞の意義を正しく把握し且つこれを最も賢明に解くところに決せられるのであらう」とする。松本和也が指摘するように、「一連の素材派・芸術派論争を形成する言表を通して、同時代文学の理念は問い直され、対立図式を乗り越えた地点に、事変下の理想の文学が思い描かれ始めていく」と言えようが、問題はその帰結である。⁽¹⁵⁾

一言で言えば、それは「国民文学」と言うことになるだろう。⁽¹⁶⁾ この時期、「文学」は旧来の枠を超えて社会的な広がりを持つことを求められていたのであり、それはあからさまなイデオロギー性とは関わりなく、総力戦体制に適合的なものだったと言える。そこで求められていたのは、「われわれ」＝「国民」にとつて必要な「文学」なのであり、同時にそれこそが「われわれ」＝「国民」をつくり出していく。

北河賢三は「都市の上・中流の抑圧・抑制と地方生活者、下層生活者の持ちあげによる、イデオロギー的平準化傾向は一九四〇年の「新体制」の時期からいっそう強められるのであるが、その点で農民文学は先導的役割を果たした」と述べているが、成田龍一が「衛生や貧困、教育をめぐるさまざまな問題に直面した一九三〇年代の「現場」の報告が、「同情」にもとづく共感の共同体を形成していった」と言うように、その他の「素材派」についても同様の事態が指摘できるだろう。

その一つである豊田正子『綴方教室』について、中谷いづみは「(豊田正子)の対極に「遊情に流れる上流中流子女」が想定され、そのよ
うな人々への「警鐘」という役割が期待されている」と指摘している。⁽¹⁹⁾
貧しい生活の中でけなげに生きる存在として豊田正子が称揚される一
方で、「遊情に流れる上流中流子女」が批判されることによって、階
層や境遇を超えた均質的な「われわれ」＝「国民」が思い描かれてい
くのだ。

『多甚古村』が各誌に分載されている時点の同時代評において、そ
の『綴方教室』に言及しているものがあるのは興味深い。武田麟太郎
『文藝時評』(『読売新聞』一九三九・二・五)は次のように述べている。

同じく改造の「多甚古村駐在記」も、作者井伏鱒二氏のお家芸
に接する愉しさと気楽さを感じる。駐在所巡査の日記の抄録めか
してあるが、これは井伏鱒二の「綴方教室」とでもたとへようか、
とにかくこの人はいつも自由作文または綴方を書いて読者に、さ
うしたものが自然に持つ皮肉な批判を聞かせてゐる。

つまり、『多甚古村』もまた「現場」を記述するという同時代にお
ける多様な方法の中の一つとして考えることが出来るのであり、農
村を舞台とした「風俗」を描くこの作品が農民文学やその他の「素
材派」の文学と共通した部分を多く含み持っていることは間違いな
い。だが重要なのは、武田が『多甚古村』の中に「皮肉な批判」を
読み取っていることだろう。また大井広介「長編中編 時評」(『槐』
一九三九・六)も、「益々井伏文学の妙味を發揮してゐるが、観照者で
ある駐在所巡査が、井伏調の余裕のうちに、素朴な正義観を蔵し、時
おり意外に辛辣な批判精神を發散し、従来の井伏文学の『ぞらとほけ』
や『あはれ』の境地から一歩進み出てゐる。／事大主義な非文学の横
行の中に超然として、一種の清涼劑たるを失はない」とやはり「批判

精神」を見出している。そこで次節からは、『多甚古村』自体を實際
に読んでいくこととした。

三、屈折する言葉

『多甚古村』は「歳末非常警戒」、「狂人と狸と家計簿」、「新年早々
の捕物」など全部で十四の章に分かれている。⁽²⁰⁾最初の日付が十二月
八日で、終わりが六月八日となっているから、描かれているのは
一九三八年の年末から翌年の初夏までだと考えてよいだろう。

それに対して、『交番』以下の川野の著作は明らかに一九四〇年以
降のことを描いている。それは『多甚古村』の元となった日記そのも
のではなく、その後川野が村から町へと配属が変わってからの時期
を扱ったものなのだ。だが、それを通じて或る程度は『多甚古村』の
元となった日記がどのように書かれていたか推測することも可能だろ
うから、両者の違いを見ておくことにも意味があるだろう。

川野の『交番』の「私」は「自己の職場にあつて、御国を愛する信念は、
人後に落ちぬつもりだ」と述べ、「英霊をボカンとして見送るものが
あつて困る。(…)民衆は事變の長期と共に初めの感謝と感激が薄れ
たのではないかと私は心配して居た。銃後にあつて、日常楽しく心
配できるのも、第一線將兵のこの偉大な御奉公の御蔭である。国家の
柱石に対して、涙と共に感謝し、拜するのが日本人だと、私は有志に
叫んだ」というのである(八月一日 奉公日)。

また、新聞記事で中学時代の同級生が死んだことを知り、「彼は死
んで永久に御国の柱となつたのだ」と感激する。そのこともあつてか、
町会において「私」は「新体制云ふのは新しい形やと思ふと良えのや。
旧体制ではお国が危くなつたのや、難かしく云ふと、自由主義の旧政
治、経済、文化では日本の国は危いのや、新秩序、全体主義、国家主義

天皇中心の皇道精神に還れと云ふ事や」と熱弁を振るうのである（九月十一日 町会）。その結果、「一部の代表等の反感」を買うことになるのだが、特高主任からは「いや君が悪いわけではないが、徐々に行く事だ。会長は、や、不満でも町総代の大部分は君に好感を持つて居て残留方を懇請に来たと聞いたが、気を落さずと、やつてくれ」と励まされるのである（九月十九日 失敗の日）。周囲から誤解されることはあるものの、「私」の国家に対する忠誠心は基本的に肯定されていると言えるだろう。

二番目の著作である『交番風景』には「交番風景の弁」という前書きがついており、そこには「私は、曩に、多甚古村にて、作家井伏先生により、街に飛出した甲田巡査そのものであるが、多甚古村の甲田巡査程に私は人間が出来ては居ないのである。要するに未だ青臭い文学巡査で、平凡な、場末交番巡査である。然し有難い事には、毎日激しい勤務のお蔭で、一般民衆の動向なり世相の一端を知るを得て、これではならぬとか、かくありたいものであるとか、さう云ふ事を、何時か筆に表現したいと思うてゐたが、たまたま郷土出身の鶴書房主田中貫行氏の好意で、こゝに長年の念願が実現し、交番風景となつた訳である」と成立事情が述べられており、「警察とは、冷たい、怖い所ではなく、親しみ易い、頼りになる所だし、警察は又民衆のよりよき理解と協力と同情があつて、初めて銃後治安を完遂さるべきであり、官自体も、反省、努力、研究、陛下の警官として恥ぢざるものとして、仁愛の心を持ち、健全なる赤子養成に、碎身奉公せねばならぬ秋が来てゐるのを、貧しい筆で代弁させて貰うた」とされている。この前書きに対応するように、本文自体も「後で、両陛下万歳、住吉町万歳を三唱して解散になつた」という一文で終わっていることからも、この書が一貫した意図によって書かれていることは明らかだ。

概して川野の著作における「私」は正義感と愛国心に溢れ、さまざまな事件に振り回されつつも自身の職責を全うすることに意欲を燃やしている。もちろん時期的な違いがある以上、『交番』などの著作と『多甚古村』のもととなつた日記とを同一視することは出来ないが、全く違う態度が描かれているとも考えにくいことから、「おそらく川野日記の駐在もまた同様、率先して時局に順応する態度だつたらう」と類推する⁽²⁾ことも許されるであろう。そして『多甚古村』の甲田巡査とは、そうした『交番』などの「私」に比べた場合、かなり誠実さに欠けると言わざるをえないようだ。

たとえば、甲田は教習生だった時、教官から（若い諸君の生命を自分にあづけてもらひたい。犯人に会つたとき、決して卑怯な真似をしないやうに。人間は生きたいと思へば際限がない。死ぬときを得たら、すなはち死を生かすことだ）と訓示を受けた思い出を記す際には、次のように言うのである。（そのとき私は何だか物悲しい気持ちに近い興奮を覚え思はず武者震ひをしたものだが、もう今ではさういふ興奮を覚えなくなつてゐる。むしろ手柄をたて、新聞にでも書きたててもらつたら、お袋が喜んでくれるだらうなどと不図そんなことを考へたりする）（一月二日）。もちろん甲田として、国家のための職責を感じていないわけではない。だがそれは、次のように独特の屈折を伴つて表現される。

私は自分のこの物品消費の状況を見て、国家から金銭をもらつてゐる私は、これだけの物品を消費して果してそれに値するだけの人間奉仕をしてゐるだらうかと熟考した。それに値する代物かどうかとつくづく考へたが、自分で軽々に判定を下すことは差しひかへることにした。それでも私は月四十三円と手当てをもらひ、年末のボーナスをもらふので、実家に毎月十五円づつを送りをし

て母と弟にも小遣をすこし送れるといふものだ。(十二月三十一日)

ここで甲田は〈国家から金銭をもらつてゐる〉ことに〈値するだけの人間奉仕をしてゐるだらうか〉と自問するのだが、それは結局〈実家に毎月十五円づつ為送りをして母と弟にも小遣をすこし送れる〉という日常的な次元に回収されてしまう。実は川野の著作においては「私」は結婚しているし、母親も再婚している。だが『多甚古村』の甲田は独身であるし、母親も再婚していない。甲田は母子家庭の長男として、母と弟を養つていかなければならないのだ。甲田はある大学生に対して、〈私は貧乏人の子に生れたおかげで、世の中の辛酸をなめました。九つするとき父親に死なれ、親子喧嘩をしたにも相手がな değildir〉と語っている(三月二十日)。しかも甲田の場合、いわゆる立身出世意識もかなり希薄なのである。甲田は実家に仕送りが出来るくらい収入があればいいのだし、たまに新聞に載つて母親を喜ばすことが出来れば十分すぎるほどのだ。

同僚からある歌詞について〈学者君、この意味、何かね〉(一月二十九日)と尋ねられもする甲田は、警官の中では比較的教養のある人物とされているようだ。十二月三十一日の記事にある家計簿には〈ゴサツク従軍記〉や〈レ・ミゼラブル〉といった書名も見える。とは言え、ある親子喧嘩の仲裁に出かけて息子の大学生に〈一言半句も口がきけなくなるほど〉言い負かされた経験があり、〈インテリの親子喧嘩は私には苦手だ〉(三月二十日)と述べる甲田は、やはり〈インテリ〉そのものではない。たとえば、捕物で活躍した刈込君が〈庭の松の下に立つて静かに真をすつてゐた〉姿を見て、甲田は〈樹下將軍のやうだなあ〉と言う。刈込君から〈樹下將軍とは何のことや〉と尋ねられると、〈勲功があつても、謙遜して木の下に引きさがつてゐ

る偉い將軍のことやないか〉と答えたものの、〈或ひは私の記憶ちがひで樹下將軍といふ熟語ではなかつたかも知れない〉と書いている(一月二日)。そのような熟語を知つているといふ点で甲田は周囲の人物たちから〈学者君〉と呼ばれるような存在となると同時に、「大樹將軍」という名称を正しく思い出せないという点で〈インテリ〉からはほど遠いのである。

また、駐在所が寒く隣の役場が暖かいところから、甲田と役場の小使さんはお互いのことを〈寒帯さん〉、〈温帯さん〉と呼び合うようになったのだが、二人が会話する場面は次のように描かれる。

支那はいつまで戦ひますか。英国、ロシア、フランスは戦ひますか。伊太利と独逸は、欧州の平和を維持させますか。いつもさういふ話をするのがおきまりで、その日その日の新聞にある通りのことをお互いに云ふだけである。私たちには定見があるわけなし、新聞に書いてない話になると双方とも意見はない。しかし日本が強い、世界一だといふ結論で最後の意見は合致する。そのうち煎餅がなくなつて帰つて来る。(十二月九日)

東郷が指摘しているように〈しかし日本が強い、世界一だといふ結論で最後の意見は合致する〉という一文は戦後において削除されているが、しかしこの言葉が前後の文脈に置かれたとき、やはり一種の屈折を伴っていることは明らかだろう。〈定見があるわけなし〉(私たち)にとつて、その〈最後の意見〉もまた〈新聞にある通りのこと〉以上のものではないはずなのだから。

また、違う日の会話では、甲田は〈温帯さん〉に向かつて次のように言う。

「いや、この寒帯さんも、もうすこし健康で才能があると大陸行きを思ひますが、何の取りえもないのでこの道で終らうと思ひ

ます。それに寒帯さんは田舎に引籠つてしまつたので、田舎の景色のやうにのんびりとして覇気をなくしました」と私が云ふと「この節は時局柄、酒のみがすくなく乱暴者もなく、違反者もすくないのでお暇で困るでせう」と温帯さんが云つた。私は何よりもこの退屈な心持が身にしみこむことを怖れますと云つて家のなかにはいつた。閑居して不善をなすやうになつても困りものだと考へるが、いまは悠々と英気を養つてゐるといふ逃げ口上もある。英気といふよりも、志を養つてゐるといふ方が大人らしいやうだ。

(十二月十五日)

要するに、甲田にとって多甚古村への赴任は〈田舎へ引き籠つてしまつた〉と表現されるようなものであり、〈閑居〉だつたのだ。そこで甲田は〈英気を養つてゐる〉、或いは〈志を養つてゐる〉という〈逃げ口上〉もある、と言っているわけだが、しかし、この〈寒帯さん〉にとつての〈志〉とは何か、甲田は少しも具体的に示そうとはしない。というよりも、そもそも甲田に〈志〉なるものが本当にあるのかどうか。甚だ疑問であると言わざるをえないだろう。甲田にとつて警察の仕事はあくまで母と弟を養うためのものなだし、他にやりたいことがあるとも思えないのだ。

また、ここで〈温帯さん〉が〈この節は時局柄、酒のみがすくなく乱暴者もなく、違反者もすくないのでお暇で困るでせう〉と言っているが、少なくとも甲田の日記を読む限りそんな印象を持つことは難しい。この村では「殺人未遂、賭博、夫婦喧嘩、親子喧嘩、水喧嘩、決闘、強盗、狂言強盗、傷害、寄付金持逃げ、恋愛、恐喝、自殺、自殺未遂、心中、心中未遂などさまざまな事件⁽²³⁾」が起こっているものであり、甲田も〈或いは人心が荒んで来てゐるのではないかと憂慮されるふしがある〉(一月二十九日)などと書かざるをえなくなる始末なのだから。『多

甚古村』の中に出てくる言葉はどれも屈折を伴つていたのであり、一つの言葉は他の言葉と結び付けられることで一義的な意味とは違う意味を産出する。もちろんどのような作品にも程度の差はあれ、そのような性質は見受けられるだろうが、川野の著作に比べた場合、『多甚古村』の言葉ははるかに屈折の度合いが強いように思われるのである。

四、逸脱の要素と〈非常時〉への回収

『多甚古村』の中には、たしかに当時の「風俗」が多彩に織り込まれている。その一つに〈学生狩り〉がある。北河賢三が指摘するように、「学生の風俗に対する取締りも以前から実施されていたが、日中戦争に入つてから格段に強化された。その端的な表現が一九三八年二月以来の数次にわたる大規模な「学生狩」であつた⁽²⁴⁾」。

学校当局は勿論のこと警察当局でも由々しき問題として、本署の命令で私は町へ不良中学生狩りに出張した。元来、私は学生狩りといふ言葉を好かないが、謂はゆる不良中学生は東京の大学生の真似をして喫茶店に出入し、飲酒喫煙し、女学生と随意の場所で見行を演じてゐる。(…)決闘に関係した学生や、喫煙、飲酒、投宿等の中学生は、みな成績劣等で良家の子弟のものが多かつた。それは良家の主婦は絶えず家を明け、裁縫学校の視察や子供教育の座談会や社交のため、殆んど自宅の子女を善導する余裕がないためだといふ。(二月十八日)

甲田もまた「上流中流子女」の抑圧に加担しているわけだが、その後で甲田は〈中学生を大勢検挙したわしは、罪は深いやらうなあ〉と他の登場人物に問いかけたたりもしている。このように甲田が時おり当時の支配的な言説からの逸脱を示していることには注意が必要だろう。また、学生とともに風俗取締りの主要な標的となつたモダンガー

ルは、次のように描かれる。

町で女給をしてゐた地藏堂の養女が腹ぼてになつて、この間から帰つて来てゐたのを私は知つてゐた。断髪をちぢらせ赤い羽織に青いぼかしの着物をきて、地藏堂の庭のお地藏様の供物台を水で洗つてゐたのを二度か三度か見かけたことがある。せんだつても村会議員の谷岡さんは「あんな軽薄なモダンガールが村に入りよつて、若い衆が大騒ぎするのは心外ぢやよ。全く現代のパーマネントや人絹は、ペンキ画よりもまだ現代の人心を安手にしちよるのや」とこぼしてゐた。しかし私は、パーマネント人絹の女給さんが、養家の庭のお地藏様を水で洗ひ清めてゐるのを見て、そのとき一概に無風流な風情とはいへないと思つた。村の人の評判では、彼女は町のカフェにゐたところお客と深くなり、腹ぼてになつたのでふらふらと戻つて来たらしいといふことであつた。(二月十五日、傍線引用者)

〈断髪をちぢらせ〉ているこの女性はたしかに〈モダンガール〉の特徴を備えていると言つてよいだろう。この時期、こういつた女性に対する風当たりはますます強まっていた。たとえば、「読売新聞」(一九三八・八・三〇)には、「非常時文相に聴く女学生」べからず令嬢／女の天性は母にあり／視野を広くたしなみを培へ」という記事が載つており、「学生に与ふる言葉」——例のサボ学生問題をきっかけに地方長官や学校長会議のある度に青年日本の行くべき道を訓示して学生の品位向上、風俗の刷新いはゆる「世界的日本人」作りを始めた非常時文相荒木(貞夫)さんが近ごろますます積極的となつて放つた第一弾があつた。戦時下学生べからず令嬢。たとへばサイン狂ひも怪しからん、飲喫煙以つての外、華美な服装また然り、パーマネント・ウエーブも面白からず近ごろ女学生の言葉遣ひキミ・ボクにいたつては

言語道断……といったやうな多分に新女大学的色彩を帯びた比較的女学生に強い風当たりである」などとある。したがつて、この場面における村会議員の見解のほうがこの時期の一般的な風潮と合致するものであつたわけだが、甲田は傍線部にあるように、そうした見解とはやや距離を取つて見るように見えるのだ。そしてこの〈モダンガール〉が毒を飲んで瀕死の状態になつたことから、甲田はその原因となつたと思われる青年を取り調べる。

「それで、出来たのはいつごろだ」ときくと「去年の春です」と云ふ。「私がカフェに行つとるうちに、懇意になりましたんですが、だんだんに深い仲になつたです。母に云ふと、母は不承知だつたです。家を出て二人で愛の巣を持ちましたですが、私に能がなくて食へぬので、私は母のところに戻つたです。女には、君が子を産んでから母に許してもらふつもりだとなだめ、地藏堂に戻りましたが、それが去年の暮れでした。女は初め不承知で、嫌やだ嫌やだ、ボク絶対に嫌やだと云つたですが、食へぬので住持のところへ歸つたです」と彼は新様式の生活者が使ふといふ言葉を用ひた。「しかし、別居しただけで、自殺をはかるのは何故ぢやね」と咎めると「今度、私の母が無理やりに、私に他の縁談を持つて来たです。私は反対しましたが、どうにもならぬので結論をかしたので、女は恨んでをつたです。私のうちへ三度も怒鳴り込んで、昨夜も私のうちへ来て喉を斬る真似をしたです。母は青くなつて逃げ出しましたが、結局は私がだましたと思ふて死にましたんや」と流石に彼は激情してさめざめと泣いた。

〈モダンガール〉にふさわしく自身のことを〈ボク〉と呼ぶ元女給の言動からは、しかし〈モダンガール〉という表象からは確実にこぼれ落ちていくものを読者に伝えているだろう。この日の日記は、次の

ように終わっている。

朝がたになつて住持が来て「たうとう駄目でしたわ」と云つたので、地藏堂へ出かけて行くと、女の顔に白い布をかけ、その部屋に近所の人たちが集まつて念仏をとなへてゐた。住持は部屋から出たりはいつたりしてゐるが、隣の部屋で私をつかまへて「気の強い娘でしたけになあ。それでも死ななくてもよかりさうに……」と手放して泣き出して「生れる子が可愛ゆうなかつたか。可愛ゆういから死んだんぢや。それにしても……」と同じことをくり返して泣いた。

ここでは甲田の感想は示されていないが、元女給の養父である住持の落ち着きのない挙動を描くことによつて、悲哀が静かに表されている。『多甚古村』の中でも最も印象的な場面と言つてよいだろう。

このように甲田は時おり典型的な視線からの逸脱を示すのだが、しかしそれよりも『多甚古村』で特徴的なのは、甲田自身の言動が繰り返し周囲の事象や人物によつて相対化されていることである。たとえば、〈戦死した婚約者の後を追ひ、若い女が薬品自殺を遂げた〉話を聞いた甲田が〈この場合、自殺の可否など問題ではありません。彼女が未来の夫の側に行けると信じ、それを楽しみに死んだ気持に美を感じます。たぶん喜んで死んだのでせうね〉と言つた際には、同僚の有賀巡査に〈でも、若い身でよく思ひつめたものですね。何か他に、別の縁談ばなしでもあつたのと違ひますか〉と冷静に返される（十二月二十五日）。また、大阪の警察所に問い合わせの手紙を出したのに対して、大阪の大地恵巡査が送つてきた復命書を読んで感激した甲田が〈大阪には大地恵巡査といふ現代の真の英雄がある〉と吹聴した際には、温帯さんが〈そりや署長さんの命令やさかい、丁寧に調べたんやろ。町の巡査は、いろいろさまざまやけになあ〉と実に素つ気なく返

答している（三月二十二日）。そのようにして、何にでもすぐに感動してしまふ甲田の単純さが浮き彫りにされているのだ。

また、女が外から呼ぶ声で目を覚ました甲田が、その女の声によつて訪問の用件を推し量る場面でも甲田の予測は見事に外れている。〈いきなり「旦那さん」と云つて駐在所に訪ねて来る人は、たいてい何かの事件を持つて来る。その声で、大体の事件の内容もわかる〉という有賀巡査の話の思い出して、甲田は〈戸をあける前に、もう一度その声に注意して、これは中年の女の夫婦喧嘩だらうと推定〉するのだが、戸をあけると〈しよんぼり〉とした中年の婦人に狂人の息子が暴れて困るので捉まえてほしいと頼まれるのである（十二月三十日）。

他にも、三月二十日の場面を挙げることも出来るだろう。甲田はある大学生がカフェ・ルルのハルミという女給と結婚するつもりになっていることを聞く。だがハルミにはハンニヤの鉄という刑務所に入っている亭主がいて、その手下である暗闇の福というのが現在ハルミの用心棒をしていることを知っている甲田は、大学生に〈たぶん暗闇の福の指しがねで、ハルミに貴方を誘惑させたのかもしれないな。これは親御さんの云はれる通り、止した方がよいでせう〉と忠告し、〈一時も早くハルミを取り締まらねばならぬ〉と考える。

だが、甲田がハルミと暗闇の福に話をつけようと思つていくと、意外な展開が待ち受けているのだ。〈僕の村の山田の息子から、手を引いてくれぬか。どんな事情かしらんが、山田の親御さんが心配してをるので、僕は気の毒だと思つた。それとも、手を引かぬと云ふなら、こつちも考へがある〉と甲田が言うと、横合から暗闇の福が〈え、姐さんが、そんな真似を〉、〈わつしは兄貴に頼まれて、ハルミさんをあづかつてゐるのに、それちあ情けねえ〉と涙をこぼし、〈なあんだ、お前まだ知らぬか〉と甲田は呆れてしまふ。そして遂には〈旦那にそ

れまで云はれたら云ひますけれど、わたしや、ハンニヤだの暗闇だのといふ世界が嫌やになつたんです。山田さんと一しよに東京に出て足を洗はうと思つたんですが、そんなに云はれりや、わたしやまあ山田さんはやめます」とハルミまで泣き出し、甲田は「大体わかつたから、今日のところは僕に任しといてくれよ」などといいかげんなことを言つてごまかす他ないのである。

そのように『多甚古村』の中で甲田の予想や判断が間違つているという場面が繰り返し描かれていることは、次のような場面を読む際にも影響してくるはずだ。

甚平さんのうちの畠では、甚平さんとその娘の年ごろになるのが二人で土を掘り返してゐた。馬を徴発されたので鋤でいちいち耕すのだが、その隣りの畠を耕してゐた作二郎といふ青年は、馬をつかつて耕してゐた。甚平さんの畠と作二郎の畠は一本の細い畦路で仕切られてゐて、作二郎は自分のうちの畠を耕して行くついでに馬といつしよに畦路を越え、甚平さんのうちの畠も耕してゐた。かういふ隣人愛の行為は非常時でなくては見る事が出来ないが、もし非常時でなかつたら、他人は作二郎の行為を見て彼が甚平さんの娘に懸想してゐると邪推するだらう。(三月二十一日)

甲田は「非常時」であるということを理由に、作二郎の行為の裏に甚平さんの娘への好意を読み取ることを「邪推」と斥けるが、果してそのように断言できるかどうか。読者が甲田と違う想像をしてみる余地は、おおいに残されていると言つていいだらう。実際のところ、甲田はしばしば「非常時」における警官にふさわしい言葉を述べるが、それらの言葉は常に相対化の可能性にさらされていることに注意する必要があるのである。

『多甚古村』が各誌に分載される過程において、武田や大井がその

中に「批判」を見出ししていたのも、右に述べてきたようなことが関わつているに違いない。しかし、『多甚古村』として出版された際には、そのような評価は見受けられない。その理由は、『多甚古村』の終わり方に問題があると考えられる。『多甚古村』の終わりの三章（休日を持つ」、「多忙多端な日」、「水喧嘩の件」）は初出未詳であり、書き下ろしの可能性が高い。そして特に最後の章である「水喧嘩の件」では、それまでバラバラであつた村人たちが甲田によつて一つにまとまるといふ「非常時」に実にあつた大団円が与えられているのだ。

前田貞昭は、「多甚古村補遺」に比べて『多甚古村』には「事件の手際よい処理者や、人情の機微に通じた巡査としての甲田巡査の面貌」があると述べているが、以上見てきたように『多甚古村』においても甲田は「事件の手際よい処理者」とは言いがたい。しかし、「多忙多端な日」で病気になる二カ月ほど仕事を休み「水喧嘩の件」で復活した甲田は、まるで死と再生の儀式を行ったかのように別人のような見事な采配ぶりを示すのである。

甲田が休んでいた間、村では水喧嘩が頻発していた。だが、（こちらが仲裁に立つと双方ともお上の沙汰にしたいので表面は仲なほりしてみせるが、こちらが引きあげると直ぐに掴み合ふ。警察はただ表向きに存在だと考へてゐる傾向がある）と言う。そのような状況の下、甲田は「国家総動員のこの非常時にもし村が乱れたらそれこそ一村だけの問題ではない」と述べ、大々的な仲裁に乗り出すのだ。

村の人々を集めた甲田は、その前で（この国家総動員の非常時に、このやうな不祥事がこの村にもあつたとしたら、それこそ由緒ある村の歴史に傷がつき、祖先のためにも申しわけない。その上に、国家に對して相すまぬ。また出征してゐる息子さんと兄弟たちに対しても何と云ふてお詫びしてよいか）などと演説を打ち、その結果（一ばん上

席にゐた村長の指図で一同は端然と座りなほし、大日本帝国万歳と多甚古村万歳を三唱して解散した」という大団円を迎えるわけだが、このような終わり方によって、それまで『多甚古村』の中にあつた種々の齟齬がほとんど解消されてしまうのだ。一つの僻村を舞台に、さまざまな対立がありながらも（非常時）において最終的には一つにまとまるという「われわれ」＝「国民」の姿が理想的に描き出されていると言える。戦時下において『多甚古村』が多くの読者に歓迎された要因としては、このような終わり方が大きかつたのではないだろうか。⁽²⁷⁾

そして「多甚古村補遺」が書かれなければならなかつた理由もまた、そこにこそあるに違いない。

五、代補としての「多甚古村補遺」

「多甚古村補遺」では、村の内部における村長派と反村長派との争いが前景化して語られる。『多甚古村』の終わりの場面の一つにまとまつたかに見えた村は、深刻な対立によって常に採め事で騒いでいるのであり、甲田も（全く気難しい人の多い村である）（十月三十一日）と述べるを得ない有様なのだ。（貸別荘）と呼ばれる（村長や村長派の金まわりのいい人たちが建てた長屋）が村内には幾つか建つており、（夏になるとこの長屋が海水浴客でみんな塞がつてしまう）（十一月二日）と述べられていることからすれば、この二派の抗争には経済的な格差という問題が絡まつているのだろう。⁽²⁸⁾

また「多甚古村補遺」には、ヘンリーさんというアメリカ人と、マサコという都会の若い女性という村の外部から来た人たちが描かれるが、彼ら是否応なしに二派の抗争に巻き込まれていくのである。ヘンリーさんやその家族に対しては、村人たちは次のような行動に出る。

私が戸籍調べに出かけたとき、ヘンリーさんは「コドモイシナ

ゲマス。コノイエニマデオヒカケテキテイシナゲマス」といった。村の子供が石を投げたのは実際で、これは村の反村長派の人たちが子供たちに寧ろさうするやうに奨励したのである。進取的な村長は、ヘンリーさんをわざわざ訪問して英語の会話を教はつたりトマトを持つて行つたりしてゐたので、反村長派の人たちは村長への面あてにヘンリーさんを排斥したものだと思はれる。（十一月二日）

マサコに対しても村人たちの態度は似たようなものだ。

村の人たちは何の根拠があるのか知らないが、彼女を売笑婦のやうに云つてゐる。たぶんヘンリーさんの第二号はんだらうと云ふものもあり、もと大阪の赤玉のダンサーだといふものもあり、心中未遂者だと云ふものもあつた。村の過半数の人たちは、どこか大阪あたりの鉄工場主の思ひもので淫売あがりだらうと云つてゐた。（十一月十四日）

そして（反村長派の元締といはれてゐる老人）が甲田のところへ（とくに旦那、あの松原に村長の建ててをる別荘へ、ちかごろ変な女が来てをるちう噂でしやないか。何でも村の若い者の噂では、先に住んでをつたヘンリーさんの廻し者ちうことですが、この非常時の際とて儼は一応旦那にお伝へしときますすけに）と言ひに来たりするのだ（十一月十五日）。ここでは（非常時）を大義名分として、二派の抗争に（他国ものを毛嫌ひする習慣）（十一月十四日）、或いは外国人やモダンガールといった自分たちとは異質な存在に対する排他性が絡まつて陰湿な言動が横行しているのである。

『多甚古村』においては、甲田はそのような言動からは逸脱するものを時おり見せていたのだが、「多甚古村補遺」においては、もはやそのようなことはない。ヘンリーさんに対しては、（初め私は、これ

こそ毛唐のスパイだと思ひ込み、周到な注意をはらつて監視を怠らなかつたものである」と言うのだし、マサコに対しても村人たちの悪評は否定しつつも、「ただ不当なのはこの非常時に村ちゆうセンセイシヨンを起すやうな派手な扮装をして、病気のため静養すると称しながら病院の患者を呼び出してダンスなどしてゐる行為である」（十一月十四日）と言うのである。しかも、マサコは明らかに甲田の気をひこうとさまざまに試みているのにも関わらず、甲田のほうはそれに少しも気づかないばかりか彼女が「危険思想」を蔵していないかどうかを探ろうとする。そして、マサコがアンリ・ルソーの絵やプールの小説を持つてゐることを知ると、「本署の庶務課にゐる木崎君にアンリ・ルソーならびにプールの素性を問ひ合せた」（十一月十五日）というのだから、甲田の戯画化は極まつていふと云つてよいだろう。川野が不愉快に思つたというのも無理はない。

また、『多甚古村』にあつた甲田の無気力な態度は「多甚古村補遺」においても見受けられる。ヘンリーさんのエピソードに付随する形で、甲田は自身が中学生だった頃、牛原先生という英語の先生が教師をやめて「去つていく最後の日のレッスンで（ラストクラス）という英文の一部を翻訳してくれた」思い出を語る。

〔…〕先生はすでに泣き出しさうな声で英文を読み、泣き声でそれを翻訳した。「アルサスの一少年の目に写つた祖国の姿、祖国は今やプロシヤ兵のために蹂躪された。言葉すら奪はれた。アメル先生は、村民に最後の祖国の授業をした。村民は老いも若きも男も女も小学校に集まつて来た。先生は悲痛な声で、最後の稽古をした。フランス語のラストレッスンをした。皆さん、と彼はいつた。皆さん、私は私は。しかし彼は黒板の方に向きなほると、チヨウクを一つ手にとつて、ありつたけの力でしつかりと、出来

るだけ大きな字で祖国万歳と書いた。そして頭を黒板に押しあてたまま、そこから動かうとしなかつた。しかし手で合図した。（もおしまひだ。お帰り。）といふやうな文章で、牛原先生も翻訳しながら泣いてゐた。私たちも泣いてゐた。全く若き日の感激の瞬間であつた。しかし私は、今は一個の平凡なポリスになつてゐる。ヘンリーさんがお別れに来て涙を目にためても、最早や私は真底から感動する人間ではなくなつてしまつた。（十一月二日）

（ラストクラス）、すなわちドーデ「最後の授業」は、普仏戦争によつてそれまでフランスの領土だったアルザス・ロレーヌ地方がプロシヤに割譲され、学校でフランス語を教えることが禁止された際に行われたフランス語の最後の授業を少年の視点から描いたものであり、愛国心と国語との結びつきを謳うために日本でも盛んに教材として利用されてきた小説である。²⁹ここではその作品がかなり振れた形で利用されているが、愛国心というよりも普遍的な人と人との別れからくる（感激）に重心を移し変えつつ、そうしたことに甲田はもはや「真底から感動する人間ではなくなつてしまつた」と述べているのである。そんな甲田は「祖国万歳」という言葉にもやはり「感動」を覚えることなど出来ないのではないか。

しかし、問題はやはり終わり方である。果して「多甚古村補遺」はどのように終わつてゐるだろうか。それは、村の青年訓練生が甲田のもとを訪れ、寺の釣鐘を自主的に政府に寄付することを提案する場面なのである。それだけ見れば、『多甚古村』のように村全体が一つにまとまるといふカタルシスには乏しいものの、国家に進んで奉仕する青年たちを最後に描くことで、やはり齟齬を解消するようなものとなつてゐると言えるかもしれない。だが、前田貞昭が指摘するように、「多甚古村補遺」の構成が明らかに歪であることに注意する必要がある

るだろう。⁽³⁰⁾この作品は「人命救助の件」、「寄付金持逃げの件」、「都会の女の件」、「村娘有閑」という四つの章で構成されているが、⁽³¹⁾そのうち前の三つが十月から十一月の事を描いているのに対して、最後の章で描かれているのは七月なのだ。つまり、作品に描かれている時期に沿って並べ替えると、「村娘有閑」の章が一番初めに来なければおかしいのである。しかも、初出の発表時期を見てみてもこの章だけ一九三九年に発表されているのに対して、前の三つは一九四〇年になつてから発表されたものなのだ。実際のところ、今まで述べてきた「多甚古村補遺」の特徴にあてはまるのは「人命救助の件」以下の三つの章に対してなのであつて、「村娘有閑」はむしろ『多甚古村』に含まれたほうが自然なように思われる。

日記の日付の順番がおかしいことに気づいた読者は、一番遅い時期を扱っているのは「都会の女の件」であることも分かるだろう。つまり、本当は「都会の女の件」こそが最後の章であるはずなのである。その章は次のように終わっている。へいまに何か不吉なことが起りさうな気がするが、その不吉なことを予想さすやうに誘ふものは何であらう。あながち別荘の彼女の行為だけとは思はれない。

七、チェホフを読む井伏

井伏鱒二「十二月一日」〔文学界一九四〇・一〕は、チェホフ『シベリアの旅』〔岩波文庫、一九三九、神西清訳〕に収められた「グーセフ」という短編を読んだ感想を記している。その中に出てくるイヴァアーヌイチという人物が「ちよつと私たちには手のつけられぬやうな激越な言辞を吐く」と言い、次のように述べている。

〔…〕いま諸事万端を考へてみて私はイヴァアーヌイチのやうな言辞を吐く人間を描写する自由がない。またイヴァアーヌイチに似た

人間を真似て書きたいといふ希望も持ち得ない。書く必要があるかどうかそれさへも知らないが、たぶんチェホフの場合は人間に対する親愛の情から書き得たものにちがひない。

イヴァアーヌイチの「激越な言辞」とは、兵士たちの命を虫けらのように扱う社会制度に対する抗議などのことを指しており、たしかに当時の日本でそのようなことを書けば、検閲に抵触する恐れが充分にあっただろう。井伏は「しかし大方針といふものを見失つてゐる私は、自分のせまい間合ひだけで物を云ふよりほかはないのである。人間に対する親愛の情が浮かんだにしても、諸事万端の運動する状態に抵触するやうなことは云ひたくない。つまり大方針のない私は勇猛心に欠けてゐる」と続ける。かなりほかした言い方だが、当時の読者には「諸事万端の運動する状態」が何を意味しており、それに「抵触」した場合にどうなるかは容易に理解できただろう。島木健作『再建』（中央公論社、一九三七・六）、石川淳「マルスの歌」〔文学界一九三八・一〕、石川達三「生きてゐる兵隊」〔中央公論一九三八・三〕などが立て続けに発禁処分を受けるといふ状況の中で作家たちが受けていた重圧というのは、やはり少なくなかつたはずである。

そして右に挙げた井伏の文章が、「多甚古村補遺」中の「人命救助の件」や「都会の女の件」と同じ月に発表されていることはなかなか興味深いように思われる。先述したように『多甚古村』の中には、権錫水の言う「矛盾・亀裂」逸脱の言説⁽³²⁾と言えるような要素もたしかに見受けられる。だが、最後の章「水喧嘩の件」において「われわれ」⁽³³⁾「国民」の統合が描かれることによつて、そうした要素も全て（国家総動員の非常時）に回収されてしまつていふと言つてよい。たとえ井伏がどのような意図を持っていたにせよ、『多甚古村』の構造を捉

えて読む限り、どのような意味によってもそれを「抵抗」とは言いがたいと思われる。そして、それ故にこそこの作品は当時多くの読者に迎えられる、井伏は「流行作家」と呼ばれるようになったのだ。⁽³³⁾

もしも井伏が『多甚古村』の成功に満足していたならば、その続編もまた、さまざまな齟齬がありながらも〈国家総動員の非常時〉には結局一つにまとまるのだという「われわれ」＝「国民」の物語となっていただろう。しかし「多甚古村補遺」は、そういうものには全くなっていないことは先述した通りである。それは言ってみれば、「矛盾・亀裂」をあからさまに露呈した作品なのだ。「戦争期の規格化の視線」にさらされながら「都会の女の件」を最後の章には出来ず、かと言って『多甚古村』のように〈国家総動員の非常時〉にふさわしい結末を付け加えることも出来なかった痕跡が、その歪な構成にはたしかに刻まれている。そして、それが付け加わることによって、『多甚古村』に描かれていた逸脱の諸要素も結末に回収されることをやめ、いきいきと躍動し始めるだろう。「非常時」によって一つにまとまるかに見えた村は、やはり常に揉め事で騒いでいるのだから。

井伏はこの後、一九四一年には徴用され、翌年の二月から十一月までシンガポールで宣伝班員として過ごすこととなる。その中で生み出されたのが『花の町』（文藝春秋社、一九四三・一二）という作品であり、それは占領下のシンガポールを舞台として、井伏の批評性が遺憾なく発揮された作品だと思われるが、紙幅も尽きた。稿を改めて論じることとした。

注

- (1) 東郷克美『多甚古村』の周辺（『国文学ノート』一一号、一九七二・三）
- (2) 拙稿「太宰治と井伏鱒二——『井伏鱒二選集』をめぐる』」（『太宰治スタディーズ』二号、二〇〇八・六）
- (3) 拙稿「太宰治全集」の成立——検閲と本文」（『Intelligence』8号、二〇〇七・四）も参照されたい。
- (4) 前田貞昭「二つの『多甚古村』——日中全面戦争下の井伏鱒二」（『近代文学試論』二二二号、一九八四・一二）
- (5) 権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争（一）——序説」（『北海道大学文学研究科紀要』一〇二号、二〇〇〇・一二）
- (6) 成田龍一「歴史」はいかに語られるか——一九三〇年代「国民の物語」批判」（『日本放送出版協会』二〇〇一・四）
- (7) 豊沢肇「日中戦争下の出版・言論統制をめぐる』」（『文化とファシズム』日本経済評論社、一九九三）
- (8) 本多顕彰「本年度の読書会を批判す①未曾有の好況」（『東京朝日新聞』一九三八・一二・二四）は、「事変下において、日本の出版界が未曾有の好況を呈してゐる」と述べている。
- (9) 演劇は高田保の脚本・演出であり、映画は八田尚之が脚本を、今井正が演出を担当した。杉林隆「『多甚古村』試論」（『姫路工業大学環境人間学部研究報告』四号、二〇〇二）を参照。
- (10) 読売新聞徳島支局編『阿波字路文学の旅（上）』（徳島県教育会出版部、一九六九・六）
- (11) 伴俊彦「井伏さんから聞いたこと その二」（『井伏鱒二全集 第三巻 月報4 筑摩書房、一九六四・十二）
- (12) 堀部功夫「『多甚古村』と『交番』と」（『京都教育大学国文学会誌』二三号、一九八九・六）
- (13) 拙稿「記録」のアクチュアリティ——井伏鱒二「青ヶ島大概記」（『学習院大学大学院日本語日本文学』二〇一〇・三）
- (14) 河上徹太郎「事実の世紀」（『文藝』一九三八・三）は「人間中心的批評主義といふべき強力な知性が、今や漸く没落したのであり、『ヴァレリー』などは、以前の『秩序』の時代に比して二十世紀をば「事実」の時代と屢々呼んでゐる。この見方は多くの評家の一致する所であつて、所謂左翼の人々も大体同じやうなことを考へてゐるやうである」と述べており、

- 板垣前掲書は「記録的文体は現代文学の獲得到達した、最も進歩的で時勢に適應したスタイルである」と述べている。また、有馬学『日本の歴史23帝国の昭和』（講談社、二〇〇二・二〇）は「(日常)の力、それをとらえ描写しうる技法、これこそ「戦時」が生んだモダンリズムの視線であった」と指摘している。
- (15) 松本和也「富澤有為男・東洋」の場所、あるいは素材派・芸術派論争のゆくえ」(『文藝研究』二〇〇八・三)
- (16) 拙稿「庶民文学」という成功/陥穽——文学大衆化と井伏鱒二」(『昭和文学研究』二〇一・三予定)を参照。
- (17) 北河賢三「戦時下の世相・風俗と文化」(『十五年戦争史2』青木書店、一九八八・七)
- (18) 成田前掲書
- (19) 中谷いずみ「綴方」の形成——豊田正子『綴方教室』をめぐって」(『語文』一一一号、二〇〇一・二二)。ちなみに、一読者の日記を基として、そうした潮流に抗うように豊田正子とは正反対の「少女」を造形してみせたのが太宰治「女生徒」である。拙稿「ある読者の「自分一人のおしやべり」が活字になるまで——『有明淑の日記』と太宰治「女生徒」」(『繡』一六号、二〇〇四・三)参照。
- (20) 『多甚古村』の初出は以下の通りである。
 ・「歳末非常警戒」(十二月八日～二十五日)：「多甚古村(一)」(『文体』一九三九・二)
 ・「歳末非常警戒」(十二月二十九日)：「多甚古村駐在記」(『改造』一九三九・二)
 ・「狂人と狸と家計簿」(十二月三十日～三十一日)：同右
 ・「新年早々の捕物」(一月一日～二日)：同右
 ・「喧嘩三件」(一月五日～八日)：「多甚古村(二)」(『文体』一九三九・三)
 ・「学生決闘の件と祝出征軍人の件」(一月十八日～十九日)：「多甚古村の人々」(『文学界』一九三九・四)
 ・「大田黒氏失態の件」(一月二十八日)：同右
 ・「松原の捕物」(二月二十九日)：同右
 ・「私娼と女給の件」(二月十五日)：「多甚古村」(『革新』一九三九・五)
 ・「東西屋夫婦喧嘩の件」(二月十八日～二十二日)：同右
- ・「オキヌ婆さんの件」(三月十日)：「多甚古村駐在記」(『文学界』一九三九・七)
 ・「恋愛・人事問題の件」(三月二十日)：同右
 ・「休日待つ」(三月二十二日)：初出未詳
 ・「多忙多端な日」(四月二日～六日)：同右
 ・「水喧嘩の日」(六月七日～八日)：同右
- (21) 堀部前掲論文
 (22) 東郷前掲論文
 (23) 東郷前掲論文
 (24) 北河前掲論文。また、同「一九三〇年代の学生生活——風俗と読書を中心に」(『史観』一一四冊、一九八六・三)は「学生のみが「享乐的」だったわけではなく、また学生のすべてが「享乐的」だったわけでもないが、抵抗力の弱い、「働かない」(?)学生に対する風当たりが強まり、娯楽や風俗的自由さえもが圧迫されていったのが、この時代の特徴であった」と指摘している。
- (25) 前田前掲論文
 (26) この文は、『井伏鱒二選集 第五卷』(筑摩書房、一九四八・二二)では「大日本帝国万歳と」の部分が削除され、『多甚古村』(新潮文庫、一九五〇・一)では「へばん上席にゐた村長が、「みなさん、お手を拝借」と云つたので、一同は坐りなほし、シヤン、シヤン、シヤンと手を拍つて、みんな「どうも有難う」と口々にいつて解散した」と改稿されている。
 (27) ちなみに、映画や新国劇の『多甚古村』に出てくる甲田はたしかに「事件の手際よい処理者」として描かれていると言えるだろう。たとえば映画について、依田義賢「シナリオ構成(邦画)」(『日本映画』一九四〇・二)は「甲田巡査は飄々と次々と現はれてくる事件を彼流の人生観をもつて処理してゆくのである」と述べ、新国劇の舞台について、芙蓉麗人「甲田巡査の眼鏡」(『警察協会雑誌』一九四〇・一)は「一つの輻輳する事務に対し妥当明快に処理してゆく手腕は、三十歳の青年巡査とは到底受けとれぬとも考へる」と述べている。
 (28) 反村長派の老人は「村長の資本主義的傾向の悪口」などを口にしていく(十一月十五日)。
- (29) 布川源一郎「消えた「最後の授業」——言葉・国家・教育」(大修館書店、一九九二・七)によれば、「最後の授業」は明治末から翻訳によって日本にも紹介されており、一九二七年からは国語教科書にも採用され

ている。

- (30) 前田貞昭「多甚古村補遺」初出覚え書——二〇〇の「多甚古村」補説」(『言語表現研究』六号、一九八七)参照。
- (31) 「多甚古村補遺」の初出は以下の通りである。

・「人命救助の件」(十月三十一日～十一月五日) : 「人命救助の件」(『週刊朝日』一九四〇・一)

・「寄付金持逃げの件」(十一月十日) : 「寄付金持逃げの件」(『公論』一九四〇・三)

・都会の女の件」(十一月十四日～十一月十五日) : 「続編／多甚古村」(『モダン日本』一九四〇・一)

・「村娘有閑」(七月十日～七月十二日) : 「村娘有閑」(『週刊朝日』一九三九・十)

- (32) 権前掲論文

(33) 山時鳥「流行作家の実体」(5) 井伏鱒二の巻」(『読売新聞』一九四〇・五・二四)は、「井伏文学の流行は、大部分そのユーモラスな希有な感触に基づくこと見てよい」と述べている。また井伏は後年、河盛好三との対談で「戦争中に「多甚古村」が売れたんです。僕は疎開中の三年半それで生活したな」と語っている(井伏鱒二「人と人影」毎日新聞社、一九七二・五)。

※本文の引用は『井伏鱒二全集』(筑摩書房、一九九六～二〇〇〇)に拠る。また、資料調査にあたっては徳島県立図書館の協力を得た。記して感謝する。

ENGLISH SUMMARY

Society and Common Sense in Times of War: Ibuse Masuji's

Tajinko Mura

Akihiro TAKIGUCHI

Ibuse Masuji's *Tajinko Mura* was a wartime bestseller and is one of Ibuse's representative works. However, this work that was well-received as a depiction of society, and common sense at the time quickly became a target of criticism after the war and was evaluated in different ways. When evaluating works that were written under censorship, it is particularly important not to be deceived by how words appear on the surface but to decipher their underlying structure. Set in a farming village, *Tajinko Mura*, which gives a portrayal of the customs and manners of the day, can be seen as corresponding to the contemporaneous trend of national literature. However, when we closely analyse this work, we find a range of elements that depart from the predominant discourse of time. Note, however, that the conclusion of *Tajinko Mura* is actually appropriate for 'times of emergency', and thus we cannot say that it recovers these elements of departure. Despite this, with the addition of the sequel *Tajinko Mura Hoi*, the criticism present in *Tajinko Mura* also comes into full effect.

Key Words

War, Times of emergency, Censorship, Novel depicting the customs and manners of the day, Farming village